

## 委員から出された意見

## 第3回P I外環沿線会議

## オープンハウスと意見を聞く会について

意見

- ・P I協議会の2年間のとりまとめとP I会議についての報告、四季分の観測結果の報告、地域毎の課題に関して具体的な形を示しながら意見を聴き、必要性の議論に反映することを目的としてオープンハウスと意見を聞く会を開催した。
- ・時々状況に応じて多くの方々の意見を聞くことが重要であること、地域の意見を聞く場を何回も設けてほしい等の声があったこと、沿線の各区市に相談したところ地域の意見を聞くことをしっかりやってほしいという声があり、当時P I会議が立ち上がってなかったこともあり、国と都で主催した。
- ・事前に情報が伝わってなかったことは、委員への配慮が欠けており反省しないといけない。
- ・案内チラシには、事実関係をしっかり記述するように気をつけていきたい。(山本委員)
- ・意見を聞く会を開催した3つの目的はすべてP I協議会で議論した問題であり、地域に戻って会合をやる時には協議員が責任をもって地元の住民に話すことが基本である。
- ・チラシの内容は、外環をつくることを前提に計画を具体的に検討し、意見を聞きたいということでありP Iとは全然違うのに、あたかもP Iであるという主張するのはおかしい。
- ・参加していない人がチラシをみれば、外環の計画はもう進んでいると認識されてしまう。
- ・行政は必要性に関して住民が納得する資料を出しておらず、時間延ばしとしか言いようがない。
- ・三鷹では、意見を聴く会の2時間のうち1時間以上が外環をつくることについて発言されていることが多く、3つの目的等の話しを全然していない。
- ・原点に立ち戻って構想段階の議論をやるべきであり、ひきょうなやり方はやめるべきである。
- ・P Iは名前だけで、本気で住民がやろうとしていることを考えてやっていないのではないか。(濱本委員)
- ・国と都はP I会議の委員とP I協議会の協議員とでは、役割が変わっていると考えているのか。
- ・地元で具体的な話をするならば、みなさんに示す段階ではないがこういうことを考えているということをもP I会議に出すべきであった。(武田委員)
- ・インターチェンジに関してそれほど細かい案ではないが、今の状態で示すことは間違っている。(濱本委員)
- ・意見を聴く会を実施する際に旧協議員はどのような立場であるのか尋ねた時は検討中である等と言っていたが、今の国の話を聞くと、旧協議員を外すことは最初から決まっていたのではないか。
- ・P Iという名前を使い、住民の話を一方的に押し切ったりせず聞くようにすると大義名分ではうたっているが、実態は果たしていかなものか。
- ・基本的なものはここの話し合いによるというスタンスでなければ話しにならない。
- ・P Iという名をかりた場にいるのであるから、行政は見識を持ち、ごり押ししないでほしい。(渡辺委員)
- ・車の持ち主だけに権利があるのではなく、周りに住む住民に一番の権利がある。外環が本当に必要ということはないと思うので、よく考えてほしい。(宿澤委員)
- ・今回の意見を聴く会の目的のひとつは、ジャンクションやインターチェンジ等の設置の有無によって効果や影響が違ふということを示して、地域の皆さんの意見を伺いたいというもの。
- ・行政目的のため住民を構ってられないということはなく、住民の意見を聴くことがこれからも大切である。
- ・P I会議で議論していることも大事であり、また複線であるいろいろな方々に現在の状況なりを正確に説明し、広く意見を聴き、今後役に立ていくことも大事である。(道家委員)
- ・外環が必要であると認められた場合には、国と都が説明をして意見を聞きながら新しい計画をつくることはいいが、今はまだその段階ではない。
- ・三鷹や調布で出した資料は、地元公表する前にP I会議で議論すべきである。(濱本委員)
- ・P I協議会で積み重なった議論を発展させるためにP I会議を立ち上げたという理解である。
- ・P I会議でも、原点に立ち戻って必要性から議論するという位置づけは変わってない。
- ・いろいろな動きがあるので、地域の住民に説明することは重要であり、地域の方々に今の情報を話し、地域の方から必要性について意見をもらうことは重要であると考えている。
- ・やり方や事前に話もなく勝手にやったという指摘や、チラシの書き方が誤解を与えるということに関しては、地域の方々に誤解を与えているのであれば申しわけないと思っている。
- ・委員の方々に事前に相談してなかったことが原因の1つだと思うので、しっかりみなさんと話しながら、意見を聞きながら進めていくことが重要であると今感じている。(山本委員)
- ・意見を聴く会・オープンハウスに関する意見を国や都はよくかみしめ、反省すべきである。
- ・私たち自身が、P I会議という貴重な機会をつぶしてしまわないよう、きちんと必要性の議論をしていかななくてはならない。(江崎委員)

- ・いまだに進め方や方法論の域を出ないというのは、はたからみたら一体何なのかと思われても仕方がない。
- ・これから半年や1年では方向づけができないと思うので、これ以上やってもあまり意味がない。(秋山委員)
- ・地域ではもう行政は絶対やるという意味が丸みえであった。
- ・今やっているP I会議の重みづけをどのように考えているのか。(栗林委員)
- ・必要性の議論をしているということに関してはそのつもりで発言しており、純粹に住民に今の状況を説明しながら、また、疑問に答えて意見を頂くという姿勢で臨んでいたつもりである。
- ・必要性の議論をP I会議でしっかりしないとイケないと思っており、必要性に資するデータをまじめに検討して、必要性について委員の意見の集約を図っていくことをしっかりやっていきたい。(山本委員)
- ・何のためにP Iをやっているのかという、P I会議で外環をやるのかやらないのかということをもまずみんな議論して決めることではなかったか。
- ・必要性の議論に入れなかった理由は、行政がさまざまなことを引っ張り出してきているからである。
- ・しっかりと論点を整理した上で地元の納得や理解を得てまとめていくのが正しいやり方である。
- ・意見を聴く会に出された資料を事前にもらうことがなかった。無視されたとしか思いようがない。(新委員)
- ・必要性の議論を真剣にやることに関しては賛成だが、必要性の議論をするまで地元へ出てはいけないということは、複線で話し合うことと相反するため受け入れられない。
- ・武蔵野市においても意見を聴く会を予定どおり開催させていただく。(道家委員)
- ・外環を真剣に考えようと思ってP I会議に参加しており、それに対してとるべき態度があるのではないかと。住民に対してもきちんと真摯に対応してほしい。(新委員)
- ・外環の計画について原点に立ち戻って、計画の必要性から議論することは全く変わっていない。
- ・ジャンクションとインターチェンジの問題は非常に大きく、どれだけ地域に迷惑をかけ、どれだけ効果があるかということが一番聞きたいことであり、引き続き地元の意見を聞いていきたい。
- ・パートナーとして今まで平等の立場で一緒に議論してきたが、結果的にパートナーの皆さんに不愉快な思いをさせてしまったことは、本当に意図してなかったが、素直に申しわけないと思っている。(川瀧委員)
- ・P I協議会からP I会議になって、会議には余り多くは期待しなくなってきたのか。(武田委員)
- ・我々が手を挙げて参加した会だから有意義な会にしたい。
- ・外環を語る上では、限られた意見だけではなく、いろんな意見を吸い取ってほしい。(湯山委員)
- ・意見を聴く会やオープンハウスを実施する必要があるが、誤解が生じるようであったのであれば、注意しなければならず、反省しているところである。(川瀧委員)
- ・司会者が指名して発言することがルールであり、司会者はルールを守らせてほしいし、委員はルールを守るべきである。(秋山委員)
- ・去年の模型とさま変わりした模型をオープンハウスに出しておきながら、P I会議ではだれも一切見ていないはずであり、それが沿線会議を軽視することである。(渡辺委員)
- ・地域への影響を少なくするという観点で、前にみせた模型と今回は変えている。(山本委員)
- ・意見を聴く会で地上部街路の話をしたため、インターチェンジ検討案の話ができなかった。(新委員)
- ・地域の方々には様々な意見があるのは事実。複線で話し合う議論の場を縛らないでほしい。行政としてはそれが務めである。
- ・井の頭の意見を聴く会で多くの方が地上部街路に疑問を呈されたことは承知している。
- ・地元の生の意見が聞けるのは、非常に大事な機会だと思っている。(道家委員)
- ・P I会議は、資料を出して必要性についてしっかり議論する場として重要であり、今まで同様、引き続きこの場をしっかり議論の場としてやっていきたい。
- ・武蔵野のオープンハウス・意見を聴く会は既に一般の住民に周知しているので、武蔵野では開催させてほしい。必要性の議論がしっかりできるような形で資料を考え、議論できればと考えている。(山本委員)
- ・必要性の議論には総論的なものと各論的なものがあり、総論的なものは必要性の議論も含めてP I会議で議論していけばいい。
- ・各論のいわゆる地域の問題は、地域の特殊性があるので、都や国が地域の声を聞きたいということもわかる。
- ・地域の問題だから地域の住民とその情報をとるだけでいいという考え方ではない方が会議の運営がスムーズにいくのではないかと。(樋上委員)
- ・P I会議を本当に真剣に最後までやりたいという気持ちでやっているが、このような議論をしなければならぬことは本当に残念である。
- ・オープンハウスや意見交換会をやるなどは言うておらず、行き過ぎはだめであると言っている。(濱本委員)
- ・いろいろな意見をどう評価していくのかということについて、次回、国と都から答えてほしい。(栗林委員)